

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

イタリアそろばんの旅②

* 明日はテストです *

木下 和真

準備は書類との戦いだ。国際交流基金のホームページから提出書類をダウンロードし、必要事項を記入する。全国珠算教育連盟をはじめ、珠算や国際交流にかかわる団体からの後援書類も無事そろえることができた。

そもそも、国際交流基金の日本文化紹介事業は「専門家」が派遣されることになっている。しかし、この「専門家」という言葉、なかなか曲者だ。はたして私は専門家なのか？ もちろんそろばんを教えることを生業としている以上、素人でないことは確かだ。しかし、「私は専門家です」と、自ら宣言すれば専門家になれるというわけにもいかないように思う。

幸い、わたしはひょんな偶然から、『武士の家計簿』という映画の珠算監修をしたことがあった。これを利用しない手はない。早速、撮影所に証明書の発行を願い出る。結果、無事証明をもらい、晴れて専門家となることができた。

また、一か月のイタリア滞在期間中、わたしの教室を手伝ってくれる先生も見つかった。

そして、準備の一年はあっという間に過ぎ去り、イタリアに向かって旅立つこととなったわけである。

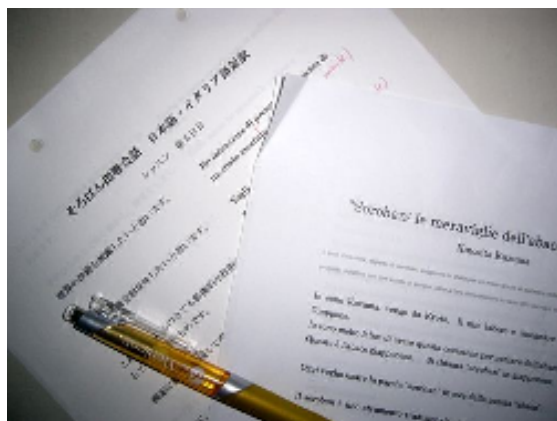
ヴェローナの空港に降り立つとコラードさんが待っていてくれた。荷物を車に乗せ、これから一か月を過ごすレジデンスへ向かう。車内ではどうしても聞きたかったことを聞いた。

「授業は何語をするの？」

返事はこうだった。

「知っていると思いますが、イタリア人はほとんど英語を使いません。」

これまで「授業はイタリア語で」とは一言も言われていない。「イタリア語を勉強してください」とも言われていない。



【そろばんテキスト対訳集】

「イタリア語を勉強しましたか？」

今度はコラードさんが質問する。

「はい」

私の日本語もいつの間にか、短い表現になる。海外で授業するなら「できるかぎり現地の言葉で」とは常に思っている。私は、

「授業はイタリア語ですつもりです」と伝えた。

威勢よく言ってみたものの、やはり不安だ。

もしかしたら、「それでは予行演習をしましょう」と言ってもらえないだろうか？ せめてイタリア語

のチェックぐらいはしてもらえないだろうか？

わたしは淡い期待をいっていた。

しかし、コラードさんの言葉はここでも端的なものだった。

「では、明日見てみましょう。明日はテストです。」

私のテストとは…さすが大学の先生。

「そのあとで、これからを判断します」

私の甘い考えは見事に裏切られた。一言でいえば、とにかくやってみろ、その結果で判断するということだ。

「はい。やってみます」

そうは答えたが、大丈夫だろうか？

けれど、やるしかない。

とはいえ、そろばんの授業はもともとイタリア語で行おうと思っていたので、日本イタリア京都館で十回のプライベートレッスンを受けた。最初のレッスンで、その時点で知っていたすべてのイタリア語を総動員して、イタリアでそろばんを教えることを担当のマルコ先生に伝えた。そして、できるのならイタリア語で授業を行いたいし、そのためにできる限りここでイタリア語を話したいのだと。すると先生はその思いを理解してくださり、一時間すべて私がイタリア語のみでそろばんの説明をしまくるというレッスンが始まった。

この活動を決めたその日から一年間NHKのイタリア語講座を聞き続け、今までかじったすべての外国語の知識をフル活用して、なんとか話した。間違いだらけだったにもかかわらず、一つ一つの語尾変化から大きな間違いに至るまで、レッスンでは丁寧に直していただいた。

私のイタリア語学習の流れはこんな感じだ。まずはインターネットを使い、イタリア語で書かれたそろばんの説明を探す。あとは辞書を片手にひたすら読む。説明に使える文章があればそのまま抜き出し、丸覚えする。その後、レッスンで、実際にそろばんを動かしながら、抜き出した表現を使う。すると、先生がその文章の間違いを直し、滑らかな表現に直してくれる。その様子をビデオに録画し、習った表現を書き出し、次のレッスンで提出する。

これを十回も繰り返すと、「日本語・イタリア語対照そろばん説明会話集」のようなものが出来上

がった。これを何度もにらみ頭の中に叩き込む。



【小学校でのそろばん教室の様子】

本番前夜も、ビデオを見返し、対訳集をぶつぶつ唱えた。

そして、いざ最初の授業が始まった。対象は小学四年生。とは言っても、日本では三年生に相当する九歳の子供たちだ。まず簡単に自己紹介をし、そろばんの各部分の説明をする。日本で準備した通りを繰り返す。次にそろばんでは表された数字を説明する。子供たちも半年前にコラードさんからそろばんの導入の授業を受けているので問題なく理解できている。そして、一珠を上げたり下げたりする最も簡単な計算まで行った。

説明の後には子供たちが実際に計算する。演習をさせると褒めることがとても大切になる。うまくできた子には「いいよ」「あってるよ」「できてるよ」と、どんどん声をかけてあげなくてははいけない。

イタリア人の先生が子供を褒めるとき言葉聞いておき、私も同じように子供たちを褒める。褒めるとき言葉は bene だったり bravo といった言葉だ。ブラボーはすでに日本語にもなっている。しかし、一筋縄ではいかないのがイタリア語だ。まず、アクセントが日本語とは違う。イタリア語ではアクセントは“ラ”のところにある。“ラ”を強く言って“ボ”で止める。日本語ではブラボーと“ボー”の部分伸ばして強く言うが、教室はコンサート会場ではないのでそこまで頑張る必要はない。また、男の子を褒めるときは bravo だが女の子を褒めるときは brava と語尾を変化させなければならない。みんなを褒めるときは bravi となる。男性型、女性型、複数形(男の子を含むとき)とそれぞれの語尾変化があるからだ。

苦労は尽きないが、一日目の授業はなんとか終了した。

終了後にテスト結果が待っている。コラードさんからは、

「あなたのイタリア語はおもしろい。けれど、子どもたちは理解していました。合格です」と告げられた。

おもしろい?? まあ、それでも合格なのでよしとしよう。ひとまずほっとした。

そして、コラードさんは続けた。

「私は仕事が忙しいので、明日からは一人で授業をしてください。」

合格＝ひとり立ち?

ちょっと待ってと思いつつ、なんとか認められたのかな、と思い、とまどっている、

「ビールを飲みに行きましょう」

と、告げられた。

三十分後、私とコラードさんは、ヴェローナでもっとも有名なアリーナを眺めながらビールを飲んでた。そして、なんでワインじゃないのだろうかという疑問はそのままに日は暮れていくのだった。

その後、何度か授業をしていくうちに私のイタリア語の説明の特徴が分かってきた。そろばんの説明をインターネットの文章からとってきたため書き言葉的説明だったのだ。

例えば、そろばんの各部分を説明するときでも、五珠のある上の部分(そろばんの専門用語で「天」という)を la parte superiore(上部)、一珠のある下の部分(「地」という)を la parte inferiore(下部)という言葉は私は使っていた。しかし、相手は小学生である。また、皆そろばんを持っているし、説明用の大そろばんもあるわけだ。もっと簡単に上は sopra、下は sotto でいいよと言われた。

やたら難しい単語を使う割には、基本的な文法ができていなかったりする。コラードさんが面白いというのも仕方がない。

また、一珠を上にも動かすときなどは *sposto una pallina in alto*(上に向かって一つの珠を動かし

ます)といちいち言っていたのだが、上にあげるときは簡単に英語の up にあたる su、下に下げるときは英語の down にあたる giù を使えばいいとも言われた。

アドバイスを受けた直後、私はある光景を目にした。その日は、コラードさんの奥さんが一歳の娘を連れて学校まで来てくれていた。二人は校門にある小さな段で遊びながら待っていたようだ。お母さんに両手を抱えてもらい、小さな体が段の上にぴよこんと上がったり、下に降りたりしている。そして、お母さんの口からは上に上がるときは su、下に降りるときは giù と発せられる。英語でいうと up、down、up、down と言いながら上り下りしていることになる。それがイタリア語になると

「ス、ジュ、ス、ジュ」

となるわけだ。

小さい子供はこのようにして言葉を覚えるのかと感心しつつ、今度、授業で使おうと心に決めた瞬間でもあった。

DALLE	ALE	LUNEDÌ	MARTEDÌ	MERCOLEDÌ	GIOVEDÌ
8.00	9.00	ITALIANO	MATEMATICA	ITA	MAT STORIA IN
9.00	10.00	ITALIANO	MATEMATICA	ITA	MAT STORIA IN
10.00	10.45	RICREAZIONE	RICREAZIONE	RICREAZIONE	RICREAZIONE
10.45	11.30	GEOGRAFIA	IRC	IRC	SC MUSICA
11.30	12.15	GEOGRAFIA	IRC	IRC	SC MATEMATICA IN SC
12.15	13.00	MENSA	MENSA	MENSA	MENSA
13.00	13.45	INGLESE	ITALIANO	SC	INFORMATICA
13.45	14.30	INGLESE	ITALIANO	SC	INFORMATICA

【小学校の時間割】

(当館語学受講生)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

イタリア通信

第9回『11 MARZO から1年を経て』

-カタストロフィーとイタリア人-

深草 真由子

“Apocalisse”、“disastro nucleare”、“l’incubo di Chernobyl nell’impero della sicurezza”、“fuori controllo”—2011年3月12日から一週間ほどの間、イタリアの日報ラ・レプブリカはこのような言葉で東日本大震災を伝えていた。センセーショナルに過ぎる表現だったのだろうか？あるいはむしろ真実を言い当てていたのか？保存していた一年前の新聞をもう一度めくってみることにした。



【日本の震災を伝えるラ・レプブリカ】

当時イタリアは、間近に迫る統一150周年記念日をめぐって国内で一悶着あり、NATOによるリビアへの軍事介入がいよいよ始まるかということで外交面でも緊迫していたが、新聞紙面に躍った字句を見ると、東日本大震災が地球の反対側に暮らすイタリア人にとってもいかに衝撃的な出来事であったかがよく分かる。家や田畑を飲み込む大津波、瓦礫の山と化した町の中を避難先へ向かって歩く一家や、若い母親の腕の中でスクリーニ

ングを受ける赤ちゃんの写真が、第一面に大きく掲載されている。一般にイタリアの新聞はカラー印刷で、図表、グラフ、地図、写真などを駆使して視覚に訴えかけるものが多いのだが、この時も紙面いっぱいの大きなイラストを用いて、原子力発電の仕組みや津波発生メカニズムを分かりやすく説明していた。

イタリア人が何より驚いたことは、巨大地震の揺れそのものによる被害が比較的少なかったことだ。2009年4月にラクイラを襲った大地震で、倒壊した建物の下敷きになって300人以上が亡くなった時の悲しい記憶が頭をよぎってのことだろう。ラ・レプブリカでは、その驚異的な日本の建築技術について、建物の耐震構造が図解されている。また歴史に残る大災害をたびたび経験してきた日本人が、生き抜くための知恵として、玄関先に懐中電灯やヘルメット、水筒、缶詰を常備している

こと、そして学校や職場で皆が真面目に避難訓練をしていることなども紹介されている。

文化面ではないにもかかわらず、文化的な視点を組み込んだ記事も目立った。今や国際的に通じる最も有名な日本語“Tsunami”の漢字表記とその語源や、天皇の歴史の説明までである。また被災地の泥の下から現れた、住人たちの思い出の品物を取り上げながら、日本の紹介—例えば先祖代々の写真を比較しながら日本の服飾文化を、幼い子供が描いた母親の似顔絵から(日本の子供は鼻を丸く描く)日本人の顔の特徴を説明して

いる。

ラ・レプブリカ特派員 Daniele Mastrogiacomo による東京電力福島第一原発の事故の報道記事は、事態の深刻さをダイレクトに伝える描写が独特であった。3号機が爆発した翌日15日の2、3面の記事では、建屋への放水作業を「怪物」に立ち向かう「この世の終わりの英雄たち」の「時間との戦い」とし、その様子を「覚める気配もない悪夢」と表現している。そして記者たちからの質問攻めにあって口ごもる保安院の二人の専門家の「うるたえた表情」から、「彼らは何かを隠している。口にすることができない、何か恐ろしいことを」として炉心溶融の可能性を疑い、さらに3つの原子炉建屋が崩壊すれば「日本は地獄を見るだろう」と結んでいる。

19日には Raimondo Bultrini によるルポルタージュ “Su Hiroshima il governo menti oggi trovi il coraggio della verità”, Parlano i superstiti della Bomba: Fukushima ucciderà per anni(ヒロシマのことを、国は嘘ついた。今、真実と向き合うべきだ—原爆の生存者が語る「フクシマは何年にもわたって人を殺すだろう」)が掲載された(ラ・レプブリカ2011年3月19日13面)。ヒロシマとフクシマ—これら「新旧のホロコースト」は、片や「西洋人が何年にもわたって開発した、歴史的な破壊のシンボル」、片や「自滅のエンブレム」である。広島市の平和祈念資料館を訪れた記者は、そこでボランティアガイドを務めるある男性に会う。この男性は原爆投下時、母親のおなかの中で被曝した。幼少期は体が弱く病院で過ごす時間が多かったと言う。記者はこの男性ガイドとともに資料館の展示品を見て回る。パネルや映像資料は、原子爆弾の威力や爆心地の惨状を饒舌に説明するが、しかしそこでは一言も触れられることのない現実、あるいは「誤魔化されてきた」と言ってもよい現実—時間が経ってから現れる、残留放射能と内部被曝による健康被害についての隠蔽されてきた諸々の真実—を男性の口から聞くことになる。筆者はこの記事を読んだ当時、放射能の本当の被害や核の歴史について、それまでの自分がいかに無知であったのかを思い知り、大きなショックを受けた。

ヨーロッパの今後のエネルギー政策はどうあるべきか。メルケルは脱原発に舵を切った。さて、

我々イタリアの進むべき方向は？—東電の原発事故が起きたのは、イタリア政府が原発再開にまわっていた最中だったこともあり、エネルギー源としての原子力についての問題意識が国民の間で一気に高まった。震災直後から新聞やテレビ、インターネット上では、原発の是非や電力のあり方がテーマとして取り上げられることが多くなった。現在のチェルノブイリの惨状もテレビで放映され、推進派と反対派の議論が白熱していた。イタリアでは6月に国民投票が行われ、政府の原発再開計画は国民の意思によって破棄されたのだった。この結果について、日本では自民党の石原伸晃幹事長が「集団ヒステリー」と言ったように、イタリアでも腫瘍学の権威で元保健相、火力発電の危険性を唱える代わりに原子力発電を推進する Umberto Veronesi が「強い感情的な反応」と呼び、原子力への根柢のない不安が国民の間に広がっているとした。

東京電力の事故をイタリア人がどう見たのか、そして彼らがどのように考え、行動したのかを報告したものとして、ジャーナリスト田中龍作氏によるレポート「原発 No! イタリア国民投票に影響を与えた福島原発事故」(『自由報道協会が迫った3.11』扶桑社、78~85ページ)がある。国民投票の行われたイタリアで田中氏が見たのは、老若男女問わず、イタリアの進むべき道を自ら冷静に考えて投票する市民の姿であり、それは決して「集団ヒステリー」などではなかったという。実際筆者も田中氏と同じく、たくさんの人たちが政府の方針をまずは疑って自ら情報収集し、家族や友人、同僚と議論し、行動しているのを見ていたので、それを過敏な群衆のパニック反応として簡単に切り捨ててしまうことには疑問を感じる。国土を高濃度に汚染されたチェルノブイリ事故の経験から、原発のリスクと放射能の怖さを、身をもって学んだイタリア人である。原子力発電が自分たちの社会システムにそぐわないという認識もある。そして何より人権や環境問題へ彼らの高い関心が、今回の国民投票の結果につながったのではないだろうか。

また田中氏は、サルデーニャ島南西部のクイッラ村にある軍事演習場において、劣化ウラン弾の試射が行われている可能性についても言及している。ヨーロッパで最大規模のクイッラ演習場で

は50年以上の間、イタリア軍や外国の軍隊、メーカーによる最新兵器の実験が行われているのだが、信じがたいことに、それは海岸、牧草地、住宅地の中に位置しているのである。殺人の疑いで捜査をすすめている検察庁によると、演習場周辺で生活する羊飼いの6割が、これまでに白血病かリンパ腫を患ったか、それらが原因で亡くなっている。もちろんクイツラで働く軍関係者や住民も同様の危険にさらされている。兵器の成分によると疑われる病気「クイツラ・シンドローム」に脅かされるのは人間だけではない。周辺では奇形の家畜が増えている。先月も生まれてすぐ死亡した奇形の羊の赤ちゃんが証拠品として押収されたというニュースを、サルデーニャの地方紙が伝えていた。そして劣化ウラン弾と言えば、コンボやイラクなどに派遣された兵士の健康被害の問題も深刻だ。戦地で使用された劣化ウラン弾による体内被曝が原因ではないかと疑われる病気を患っている元イタリア軍関係者は、少なくとも2500人、死亡したのは216人にもものぼるそうだ。一部の被害者は国を相手に訴訟を起こしており、予防原則を怠ったとして国防省は損害賠償を命じられている。し

かし世間の理解を得られず、沈黙を強いられているヒバクシャはまだ沢山いるのだろう。悲しい現実だ。



【コンボ派遣のイタリア兵と劣化ウラン弾がテーマの映画、Le ultime 56 ore (邦題『G.I.S.特殊介入部隊 56HOURS』、クラウディオ・フラガッソ監督、2010年)のワンシーン】

参照： vittimeurano.com, *il blog sul presunto killer*. A cura di Francesco Palese, <http://finchiestauranio.blogspot.com/>

(元当館スタッフ)

… 会館 だ よ り …

イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア京都館

3/31 (土) 11:00～12:30

3/31 (土) 13:00～14:30

4/ 2 (月) 11:00～12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

4/ 3 (火) 19:00～20:30

● 梅田：大阪駅前第4ビル

4/ 1 (日) 13:00～14:30

4/ 4 (水) 15:00～16:30

4/ 4 (水) 19:00～20:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時：4/ 7 (土) 15:30～17:00

会場：日本イタリア京都館 本校

講師：当館スペイン語講師

ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時：4/ 4 (水) 10:30～12:30

会場：日本イタリア京都館 本校

講師：当館ポルトガル語講師



編集・発行 / (財) 日本イタリア京都館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>